

骨董百話 12

中国龍泉窯米色青磁 双魚紋鉢
 (直径20 cm、高さ4 cm、南宋13世紀)

二千年以上に亘り中国陶器の中心は青磁であり、それは「玉」を人工的に造り出そうとした結果でもある。玉には「仁」「義」「礼」「智」「勇」の徳が備わるとされ、富や権力の象徴でもある。青磁の基本は単色釉であり、それだけに千個の青磁器があれば千色の違いがあり、簡素で崇高な美は見る者を飽きさせる事が無い。特に北宋時代耀州窯で焼造された片切彫や貼付文様の深い溝に溜った青磁釉は、グラデーションを生み出し、息を呑むほどに美しい。

北宋から南宋にかけて官窯が設置され、至高の青磁が誕生した。日本には鎌倉時代から盛んに輸入され、「砧青磁」と呼ばれた澄んだ青緑色の磁器は、貴族や武家、社寺等に供給されていく。続く元、明時代もこの



丈夫で美しい磁器は日本のみならず世界中に輸出され、当時の中国経済を支えていた。

掲載の鉢は南宋時代龍泉窯で焼造された双魚紋鉢で、2匹の魚が貼付によって向かい合うスタイルや器形は同時代の砧青磁と全く同じなのだが、その色が「青」ではなく「黄」なのだ。米の粉の色という事で「米色青磁」と呼ばれている。従来は青磁色を狙ったものが失敗して米色になったと言われていたが、南宋時代の官窯の陶片に意図的に米色を造ろうとした物が見つかり、この鉢も意図的に造り出された事が分かる。

あらゆる物を人工的に造りだそうとする中国人のひとつの表現なのかもしれない。

李朝三島象嵌徳利 (高さ11.3cm、16世紀)

李朝の工芸品をこんなにも愛して止まないのは日本人だけだろう。前時代の高麗の工芸品は格調高く端正で、高麗青磁をはじめ金工・木工や石像など世界的にも評価をされている。もちろん、そうした一級品を評価しつつも、日本人は下手な李朝工芸に親しみを感ずてしまう。雑器も雑器、彼の地では見向きもされなかった物が日本の生活のなかで息づいている。

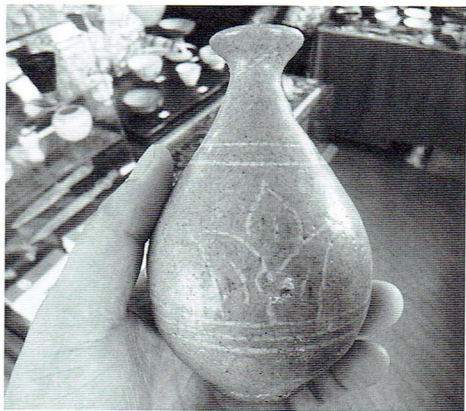
掲載の徳利は李朝初期三島象嵌徳利と呼ばれている物で、半乾きの器胎に文様を彫り込み、そこに白土、黒土を埋めて文様にしたもので、この「象嵌」は焼物に限らず全ての工芸品に多用されている事から、李朝時代を特徴付ける技法になっている。一見して頼りなさげで、水平に引かれた二本の大地から三枚

の葉とその間に一本の葱坊主みたいな花がある。何を表現したのか、素朴な文様は現代の抽象画を見るようで、寛ぎと和みを与えてくれる。手取りの良さも魅力的な物なのだが、この徳利、寸法が一回り小さい。

元来、李朝の徳利は

日本の酒器に合わせたものではないので、大きすぎたり重過ぎたり、丁度良いと思って使うと油臭かったりで、なかなか「これは」と思う物は見つからない。

それでも骨董好きは徳利に限らず盃でも茶碗でも盆でも、何か一つ身近に自分好みの李朝工芸を置きたいと、いつもアンテナを張っている。こんなにも愛しく感じるのは、日本人のDNAの中に、古里を感じさせてくれる何かがあるからではないだろうか。



中国元時代染付陶片(残径12 cm)

ショーケースの中に入れてある陶片を見つけたお客さんから「こんなカケラも売り物ですか」とよく聞かれる。

近頃は陶片を箸置きやつまみ入れなど、その絵柄や形を生かして上手に生活のなかに取り入れる人が増えている。

もっとも、昔の好事家は陶片を継ぎ合わせてひとつの茶碗にして「五十三次」という銘をつけたり、盃や徳利の欠けた部分に別の陶片を合わせてその景色を楽しんだりと完形品には無い自分だけの世界を創り上げていた。そもそも残欠を愛でたり、キズやシミを良しとするのは日本文化の特性なのかも知れない。

私の店に置いてあるのは売り物ではなく、骨董屋が「つけ石」と呼んでいる本物と贋物を見分ける為に使う物で、主にその時代の遺



跡から出土した物。写真の陶片は中国元時代初めて磁器にコバルトで絵付けをした染付と呼ぶもので、世界での価値も市価も高い。もちろん完形品などは望むべきも無く、陶片ならばこそ手にすることが出来る。

書籍の解説や写真、美術館のガラス越しではいくら見ても良く分からない事が多い。その点陶片は割れた断面から見える磁土や底部の厚みや釉薬の色調など完形品では分からない多くの情報を教えてくれる。

タイバンコクの宝石問屋で中国清朝時代の極薄い陶片を、絵柄の良い部分を丸や四角にカットして、シルバーのペンダントトップに嵌め込み、アクセサリーとして大量に売っていた。同じ陶片を利用するにもそれぞれのお国柄が出るようだ。

骨董百貨話 ⑨

犀角盃 (18~19世紀 高さ10cm)

骨董品のなかでも少し特殊なものがある。

この犀角盃もそのひとつで、金のように犀の角の希少性、素材そのものに価値がある。そもそも犀の角は鼻の皮膚が一部変化したもので、これを削って飲むと苦い味がするらしい。

中国の明時代以前の犀角盃は主にアジア犀(ジャワ犀)で、インド

シナやインドネシアに生息し、その怪異な姿をほとんども目にすることが無いことなどから、昔から霊獣であるとされ、その角を削って飲めば様々な毒を消し、頭痛や寒熱を治し、さらに長く服用すれば病気に罹らない霊薬であると信じられていた。

その為多くの犀角が盃として愛用されてきた。明代以降はアフリカ諸国から、より大型な白犀・黒犀の角が手に入るようになり、盃だけではなく精緻な工芸品として多用され、その結果現在ではアジア犀同様に絶滅の危機

に瀕している。

掲出の犀角は中国の精緻な文様とは違い、側面にベルト通しの穴があり、常に身に付けて水を飲む時に使う実用品。両側面に龍の子供である蛟龍(こわうりゅう)が彫られているのも水に因むからだろう。いつ頃日本に伝わったのか分からないが、おそらく山岳少数民族の持ち物だったと思う。



江戸時代の文献にも象牙や香木、玳瑁(たいまい)などと共に犀角も南方からの輸入品として載っている。当時から貴重品として扱われていたのだろう。実際には犀角

に万能の効用は無いようだが、昔からの迷信に支えられ、今でも中国系の人達には根強い需要があり、その価値は高まるばかりだ。人間の果てない欲望の先にこの盃があるのかと思うと、切なさと同時に大切に守らなければいけないという思いが交差する。

氷コップ

一年の四季が明確な日本において、ガラスと聞くと夏を連想してしまう。不思議なことにはガラスが日本に伝来して約1500年の間、積極的にこれを取り入れようとした痕跡はあまり見当たらない。

文化や文物の集積地であり、常に外来文化を受け入れ、それを日本独自に消化、発展させてきたのに実に不可解に思う。

ガラスの発展は江戸後期に見られるが、本格的に工業として成り立っていくのはやはり維新後、鎖国が無くなり日本が西洋文明を取り入れ、それに追いつこうと近代化に進んで行く時まで待たなければならぬ。

今では明治から昭和初期に造られた電気笠やランプ、氷コップ等が骨董品となり、収集アイテムになっている。



私も幼い頃、夏になると母にねだって氷屋でかき氷を食べた。その時は一番高価なあずきに白玉、アイスが乗ったもので、一口食べると頬がジンと痛くなり、また一口食べると

今度は頭が痛くなりながらも夢中でスプーンを動かしていた。その時は氷コップの美しさなど気づきもせず、ひたすら氷あずきの美味だけを楽しんでいた。

全部食べ終わり、底に残ったわずかな汁を吸りながら、氷コップの水玉文様の隙間から表通りを歩いている人を見ると、何故か別世界のように見えた。今でも時々骨董市などで水玉文様の氷コップを見つけると、母と一緒に食べたかき氷の美味しさと、それを頬張る私を見つめる母の優しく清らかな眼差しを思い出す。

安南鸚鵡(オウム)型燭台(全長18.5cm、高さ12.3cm、11世紀)

紀元前111年、前漢の武帝が南越国(現ベトナム北部)を征服し、以後10世紀まで中国の支配下に置いた。安史の乱、黄巢の乱と続いた宋王朝の疲弊と衰退のスキに、ベトナム人(キン族)による独立を果たした李朝は、国号を大越とし、大越国(1009~1295)を建国する。

長い抑圧から解放され、民族の誇りと新たな国造りに、当時の人たちは希望に満ちていたことだろう。その中心である首都(ハノイ)の整備。当時の持てる最高の技術と英知を結集し進められたであろう宮殿の建設。王宮の随所に配置され、隅々を照らし出す燭台。この鸚鵡型燭台を初めて見た人は、その造形の力強さと美しさに、皆一様に感嘆の声を



あげる。良く精製された白色の土に黄釉を掛け、羽や頭部の一部に褐釉を塗り分け焼成されている。宋の定窯にその原形がうかがえる。いかにも南国らしいその姿は、エキゾチックでもあり、当時の宮殿に良くマッチしていた事だろう。

この燭台はいくつかのパターンがあるようだが、作られた時期も、使用された場所も限られていた為、完形品は極めて少なく、ベルギーのユエ・コレクションや町田市立博物館、ハノイ歴史博物館、それに個人コレクション等、おそらく世界中に数10点があるくらいだと思

う。今、その中の1羽が千年の眠りから目覚め、海を渡ってここ市川で羽を休めている。

骨董百話 ⑥

ドンソン(東山)流水文銅鐘 (紀元前約200年、高さ51cm)

人が生命を支えていくうえで、水は何より大切なもの。それだけに人々は太古より様々な形で水と関わってきた。流水文や渦文もそのひとつの現われで、縄文・弥生土器、銅鐸、中国の殷周銅器、インカ、マヤ文明等、世界中にその痕跡を見いだす事が出来る。

紀元前、漢民族に圧され、一方は海を渡り日本列島へ、一方は長江沿いに山岳方面に移り住み、現中国雲南省に青銅、鉄器を持つドンソン(東山)文化が生まれた。

このような形の大型の銅鐘は、アジアでは日本とドンソンにしか無く、中国の儀礼用楽器や、朝鮮半島から移入された馬鐸と呼ばれる小型の鈴とも違う。従来はこの馬鐸が発展し、大型化して日本の銅鐸になったとされて



いるが、私はむしろ、このドンソンの銅鐘にその起源があるように思う。

もう一方のドンソンを代表する青銅の太鼓に表現されている文様と、日本の銅鐸との文様に、多くの類似点があるからであり、この

銅鐘にある流水文も、銅鐸にある流水文の原型ではないかと思われる。いずれ研究が進めば明らかになると思う。

イギリスの大英博物館にも全く同じ物が展示されているので、

同じ鑄型から造られた物かもしれない。この銅鐘を見ると、日本人のルーツと何かしら関係があるようで興味は尽きない。いずれにしても世界には、未だに知られていない様々な物が眠っているようだ。

骨董百話 ⑤

安南魚紋盤 (15世紀~16世紀直径24cm)

1998年、現在のベトナム国の中部都市
ホイアン沖合いから大量の安南陶器を積んだ
沈没船が発見された。ホイアンは17世紀徳川
幕府の鎖国政策が始まるまで、多くの日本人
が駐留し日越貿易に従
事していました。

それゆえ、安南陶器
は古くから日本に伝来
し、その軟らかい肌や
滲んだような染付けの
色に当時の茶人達は大
いに魅了されたようで、
盛んに写し物が造られ
た。あの斬新な織部独
特の緑釉も安南緑釉に
影響を受けているとい
われている。

98年に私がホイアン
を訪れた時、街中至る所に安南陶器が溢れて
いた。服の仕立て屋、雑貨店、飲食店、果て
は路上に新聞紙を拡げ、その上にうず高く積
み上げられていた。以前はインドネシアやタ



イの骨董店で少量見るだけで、これほど大量
に、しかも多種多様な安南陶器を見るのは初
めてで、南国の熱気と相まって興奮したこと
を覚えている。

もちろん一級品からカケ
ラまで様々だったが、それ
も今は昔の話。無尽蔵とも
思われた安南陶器も、20
00年アメリカで行われた
オークションを始め、バン
コクやベトナム国内の骨董
店に行き渡り、現在のホイ
アンには少量残るだけになっ
ている。

この盤には様々な絵柄が
あり、多くは花鳥文だが、
稀に虎や蝦文様などもある。
魚のモチーフは中国元時代
に流行したもので、陸続きのベトナムは常に
中国の影響を受けてきた。風薫る五月晴れの
なか、悠々と泳ぐ鯉の姿に重ね合わせ、今回
この安南魚紋盤を取り上げてみました。

骨董百話 ④

そば猪口

全国どこの骨董店、骨董市に行っても、必ず目にするのがこのそば猪口。昔は10客、20客入りの箱に入って店の床下に置かれていた物が、いつの間にか出世して棚の上に澄まして飾られるようになった。

本来はナマス入れや小向附として造られたもので、そばを食べるために造られたものではないが、誰言うとはなしに「そば猪口」という名称が定着している。

いずれにしても一器多様、これほど使い勝手が良く、かつ、骨董品としての価値

をもつ物もまず見当たらない。お茶やコーヒーを飲んでも良いし、花入れや小物入れ、灰を入れて線香立てにとアイディア次第で用途は

尽きない。

また、絵柄も豊富で、文様の形の違う物など含めると、5千種以上もあると言われている。価格も数千円から数万

円まで様々で、初めて骨董品を買うにはうってつけのもの。

私も若い頃、高価な中国陶器が買えず、山積みになった猪口のなかから水仙文様の猪口を見つけて支払いをする時「貴方、いい物を選んだね」と店主に褒めてもらったことが遠い昔のことのように。

まずは1個、骨董市にも出掛け、好みのそば猪口を購入して早速何かに使ってみれば、1個が2個に、そしてナマス皿や中皿・大鉢など収集の範囲も拡がり、いつの間にか骨董病にかかっているというのが多くの愛陶家がたどる道。



骨董百話 ③

ちょうしけん 趙之謙の書 はるゆるむ「春紵」 120×40cm 紹興の人 字を益甫 (1829~1884)

あるコレクターの家で、リビングに掛かるこの書を初めて見た時、墨跡鮮やかな二文字の隷書体が、あたり一面に気品と福音をもたらし、空間を支配していた。

書の作者は趙之謙。

中国清朝末期、奉新、南城の知県を歴任し、詩、書画、刻印に多くの秀作がある。稀代の天才として清末第一と讃えられていて、中国歴代書家中でも筆頭に挙げられている。

昔から「書画・骨董」と言われているように書画を第一に位置付ける。特に書は、極論すればその人そのものだからであり、自分自身の教養や、文化の尺度を計るのに特に大切にされてきた。



「春紵」辞書をひくと「ゆるむ」は「暖」となり、隙間やゆとり、やわらかく、規則が厳しくない等になっている。しかし、この書にある「紵」は糸偏あまに予あまとなっている。私人の解釈は、春が徐々に近づいて暖かくなり、着ている物も少しずつ薄くなり、編んでいた衣服の糸が予あまってくる。そう読み解いたのだが、いかがなものだろう。

中国でのあの狂ったような

「文化大革命」という名の下の

国中の優れた文物の破壊、流出が無ければ、今もどこかの

教養のある大人の房たけいんに掛けていたであろう。運良く難を逃

れ、海を隔てたこの日本に渡り、大切に守られている。こ

んなにも素晴らしい書が見られ、

実際に幸福なことだと思っ

ることは、漢字文化のありがたさであり、

実際に幸福なことだと思っ

ることは、漢字文化のありがたさであり、

実際に幸福なことだと思っ

ることは、漢字文化のありがたさであり、

骨董百話 ②

唐 ^{かいゆう}灰釉加彩騎馬女人俑 (高さ35cm) 8世紀

永い中国の歴史上、唐(A.D.618〜907)という時代はとりわけ光り輝いていた。西はベルシヤ、アラブ、インド、アフリカ、東は渤海、朝鮮半島を経て日本まで、ユーラシア大陸を横断するシルクロードを造りあげた。

多種多様の民族、文化、文物が交流する100万都市「長安」。日本からも遣唐使として安倍仲麻呂をはじめ、留学僧や留学生が訪れ、その優れた文化、文物、律令制や都市計画、宗教や思想までありとあらゆるものを日本へと持ち帰った。

商業が飛躍的に発展し、多くの商人や貴族が裕福になるに従い、その死後も繁栄が続くようにと厚葬の風習が高まり、副葬品も生前と同じように豪華な物になっていく。唐代の

社会には男女の区別が無いほどに、自由で開放的な気風に満ちていた。

この若い女性も腰にベルトを締め、膝まで届く長袍を纏い、足にはブーツを履く。当時は大流行した胡服を身につけ、西域からもたらされた馬に跨り、

真っ直ぐに一点を見据えている。髪型も流行のもので、当時の風俗が見てとれる。

明器(亡くなった人物と一緒に副葬品として埋められたもの)として造られたこの俑は、

低火度で焼かれた粘土の上に白泥を塗り、その上から彩色したもので、永く土の中に埋もれていた為、当時の色彩はほとんど失われているが、うっすらと残るその唇の紅色は、栄華を誇った唐時代を偲ばせると共に、早春の梅の花びらのように美しい。



縄文土器 加曾利E式深鉢（高さ46cm） 縄文中期

現在の日本文化、芸術には多くの外来文化の影響がみられますが、縄文芸術は日本独自のものといえます。古代において、他のアジア地域をみても土器といえば機能性を重視したものがほとんどで、日本の土器にみられるような装飾や芸術性のあるものをみることは出来ません。七千年の永きに亘る縄文時代、とりわけ土器や土偶にみる独自性と芸術性には、多くの人の心を揺さぶるものがあります。

イギリスの芸術家バーナード・リーチ氏は、富山県氷見市、朝日貝塚出土の土器を見て「これこそ世界一の土器」と賞賛し、詩人の宗左近氏は「日本人の魂の始原であり、世にも稀な芸術品である」と喝破しました。

写真の土器は縄文中期（約四千年前）の加曾利E式深鉢土器です。人々の生活も安定して、集落も大型化した時代のもので、美しい曲線と、安定した造形に、時代を越えて太古の昔に想いを遊ばせることが出来ます。

また、鑑賞だけでなく、土器の中に落としを入れて花を活ければ、新たな発見と共に、今までと違った魅力にも出会えます。土器や



土偶を一つの芸術品と捉え、そこから発光されるエネルギーを感じることが出来るならば、そこには無限の美の世界が広がっていくことでしょう。